MAY 2005

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

Documentation No.1

ドキュメンテーション

創刊に際して
学生の声
BOOK REVIEW
活動報告
新任教員紹介

創刊に際して

学会会長　岡田　靖
Yasushi Okada

本学では司書の養成には初期の時代から力を入れてきました。例えば、昭和２９年以来継続している司書・司書補講習は、現在ある大学の中で最も長い伝統があります。そのように司書養成では伝統ある本学の文学部にこのような学科を設置する計画は昭和の時代からありました。私事になりますが、私の父が在職中（昭和５０年代前半）にも図書館学科設置の話があったと聞いております。しかし、それも諸般の事情で実現には至っておりませんでした。

今回は文学部のより一層の発展を図るためということで、初期の構想から３年、やっと昨年４月にドキュメンテーション学科がスタートしました。スタートまでにはいろいろと解決すべきことが生じました。なかでも、学科名については多くの議論がなされました。図書館学科が対象とする資料から世の中にある文献資料（ドキュメント）全体へと範囲を広げよう、そして、それを処理する知識と技術を学ぶ学科にしよう、ということで、全国でここ鶴見大学だけにしかないユニークな学科、ドキュメンテーション学科となったのです。それ以外にもいろいろありましたが、その中でも特に、設置までもう少しという時に、学科設置にむけてご一緒していた堀込静香先生が急逝されたことは忘れることができません。先生も常々学科発足後は、他学科のように学会を作り活発な活動をしなければとお話していらっしゃいました。会報１号刊行に際して、先生のご冥福をお祈りさせていただきたいと思います。

学科がスタートして早くも１年と２ヶ月がたち、４月には２期生を迎えることが出来ました。学科の完成まではまだ３年近くかかります。未完成な分いろいろな問題が生じるでしょう。しかし、それに負けずに３年後には１期生諸君が立派な社会人として巣立っていくであろうことを期待しております。その為には関係各位のご尽力をいただかなければなりません。それとともに学生諸君と我々教職員のより一層の努力と協力体制を整えて、お互いの努力と協力で立派な学科を完成させて行きたいと思っております。

そして、鶴見大学ドキュメンテーション学会も昨年７月にスタートしました。本学会は学生諸君と我々教職員の親睦を深めると共に、お互いに切磋琢磨して研究を進め、知識を深め、技術を磨いていくことを目的としています。その学会行事として、７月７日に発足総会、１２月２２日には Ching-chih Chen 教授（米国・シモンズカレッジ図書館情報学大学院）をお迎えしての国際セミナーを開催しました。このセミナーを機会に本学科の長塚教授を中心として Chen 教授との共同研究もスタートしております。新学年になりましてからは、この５月に新１年生を中心とした印刷博物館（トッパン）見学も行われました。１２月には、総会と講演会も予定されています。

そして、いよいよ会報 " ドキュメンテーション（Documentation）" の刊行です。この会報は会員の意見・情報交換等の場です。投稿は会員であればどなたでもできます。学生諸君からの投稿を期待いたしております。この紙面を通じて、会員相互のより密接な協力体制を築き、学科・学会の更なる発展へとつながれば幸いです。

この会報はわれわれ教職員だけでなく、学生諸君と一緒に編集するものです。現在は学生４名と教員２名が編集委員として活動しています。が、それ以外にも興味ある学生諸君の積極的な参加を期待しています。

学生の声 ―１年間を振り返って―

創刊に際して
学生の声
BOOK REVIEW
活動報告
新任教員紹介

広がる輪、大学生活

阿瀬 正裕（２年）
Masahiro Aze

高校時代とは全く違う大学生活。制服はない、授業は自ら選ぶ、遠距離通学など新鮮な気持ちとともに戸惑いを覚えながらのスタートでしたが、慣れてくるうちに友達も増え、いつからか不安な気持ちは消えていました。この一年間を振り返ってみても、私は充実した大学生活を過ごしてきた気がします。

充実した大学生活を送ってこれている理由の一つには部活動に入ったことも大きく関係していると思います。私は入学前から既に『弓道部』に所属しようと決めていたので、入学してすぐに鶴見大学の道場へと足を運んでいました。そこでは共に真っ白な状態から始めた、良き友でありライバルでもある同学年や、射法や礼儀作法を教えて頂いている師範や先輩方と出会えるなど、学科、学年を越えて一気に輪が広がるのを実感しました。授業後は部活動かバイトの日々で、土日には試合が入るなど休みが無い週も多々あったりと辛いこともありますが、何か一つに打ち込み、自分を磨き挑戦し続ける楽しみができたことは、私を大きく変えてきた最大の要因かもしれません。

授業に関しては、一年次では体育や選択科目など教養関係のものが多かったり、コンピュータの授業では古いＯＳと古いソフトを使ったりと、いろいろと驚くことが多くありました。確かに私たちはドキュメンテーション学科の第一期生であるために、授業の内容や学会活動など、先生方が試行錯誤している様子が見受けられましたが、それもこの学科の後々の発展のために生かされていくのではないかと思います。色々と大変な面もありますが、司書、司書教諭、教員などの免許を取得する際に優遇されていたり、高度情報化社会に対応できるコンピュータ技術を学べたり、良き友人らに出会えたりと、私は一年間を過ごしてきて、この学科を選択して良かったなと思っています。

ドキュメンテーション学科は、主だっては社会にある膨大な資料や情報を的確に整理する技術を学びますが、そのために必要なコンピュータ技術も同時に学んでいくことができます。また、三年次からは書誌学的な色彩の強いコースとコンピュータ技術を中心においたコースとに分かれていきます。私は将来プログラマーとしてソフトウェア開発に携わりたいので、来年以降の授業を今から楽しみにしています。しかし、学校の授業だけでは自分の夢を実現するにはまったく足りず、やはり自ら『資格』を取る必要性があると思い、現在「Ｃ言語プログラミング能力認定試験」を３級から取得していくために勉強をしています。後々には「ソフトウェア開発技術者」の資格も取りたいと思っています。これからの大学生活も、将来振り返ったときに充実していたと思えるように、部活でも勉強でも目標を設定し、日々『文武両道』をモットーに過ごしていこうと思います。

PHOTO：真鍋智史（１年）

知識だけでなく

北村 雅美（２年）
Masami Kitamura

私は歴史や文化を広く伝えてゆく仕事がしたいと考え、特にアーカイブ（archive）というものに強い関心を持っていました。このドキュメンテーション学科に行こうと決めたのは、古典籍や古文書といった古い資料を、コンピュータ技術を用いて、将来にわたり多くの人が利用できるようにする技術を身に付けられるということから、自分にとって最適な環境だと感じたからでした。その当時、私は他の大学の４年に在学しており、更に進学することに関しては様々な不安もありました。しかしそれ以上にこうした仕事をしてゆきたいという気持ちが強く、卒業後の進学を決意しました。

昨年入学してからこの一年の間に、様々な分野の授業を受講しました。その中でも岡崎久司先生の「書物文化論」の授業がもっとも心に残っています。この授業では、書いた人の心の叫びをそのまま写し取ったような手紙や日記などの文章にたくさん触れました。字を習ったことのない野口英世の母シカが、息子を愛しく思う気持ちから懸命に書いた手紙。東京オリンピックのマラソンランナーを勤めた円谷幸吉という青年は、世間から寄せられる期待とそれに答えねばという重圧の狭間で悩み苦しみ、ついに自ら命を絶ってしまいましたが、その彼が書き残した遺書。ナチスドイツによって悲惨な人生を強いられたユダヤ人の少女「アンネ・フランク」が自らの複雑な胸の内を綴った日記。文章を読み、感じたことを言葉や文字にする、それは簡単なようで予想以上に難しい作業でしたが、今までにこれほど書物と、そして自分と向き合ったことはありませんでした。異なる時代や境遇のなかで生きた人々のそれぞれの人生に目を向けることで、人間が生きるということについて改めて考えさせられるなど、単なる学問的な知識だけではない多くのものをこの授業では学ぶことができました。

そして２年になった今年の後期からは、いよいよライブラリーアーカイブコース（ＬＡコース）、デジタルドキュメンテーションコース（ＤＤコース）の専門授業が本格的にスタートします。私が進もうと考えているＬＡコースでは、実際に古典籍等に触れながら学ぶ授業もあり、今からとても楽しみにしています。また日本で初めてというこの新しい学科を盛り上げていこうという先生方は、熱意に溢れ、生徒の悩みや疑問に対しても大変親身に耳を傾けて下さいます。こうした中で第１期生として参加できたことを嬉しく思うとともに、今後ますます発展し、様々なことに挑戦できる学科になっていくことと期待しています。

BOOK REVIEW

三杉隆敏 著『真贋ものがたり』（岩波新書 新赤版 451、岩波書店、1996 年）

著者は長年、世界の陶磁器の鑑定に携わってきた人物で、体験談を織り交ぜながら、歴史上有名なニセモノの話、作る人・買う人・売る人の間で繰り広げられる駆け引きなどを述べる。真贋の判定には科学的な分析を大いに導入せよ、しかし贋物にも美術史的な価値があるのだ、という著者の主張には共感できる。書物の場合にも、オリジナルか、その写しか、ということが問題になることもあるので、古典籍に興味がある人にはとくにお勧めしたい。（堀川貴司）

＊鶴見大学図書館の請求番号は新書 706.7/M

学生の声

—印刷博物館 見学—

創刊に際して
学生の声
BOOK REVIEW
活動報告
新任教員紹介

感激、一転３Ｄ酔い

中澤 大輔（１年）
Daisuke Nakazawa

私たち１年生は、この大学に入学して約１ヶ月とちょっとが経ちたいぶ大学生活にも慣れてきました。先日の５月１４日には、東京飯田橋の「印刷博物館」を見学しに行くことになり、少し小中学校の遠足の時のような雰囲気の中出かけました。入学式があり、各々のオリエンテーションを済ませてから、はじめての行事だったので多少のウキウキ感がありました(少し子供っぽいだろうか)。最初は「博物館」という名前から、堅苦しく、古くさい建物を想像していました。しかし、実際はかなりキレイな建物の中にあり、少し感心しました。

中に入って、印刷の歴史についての展示を見ました。展示内容を紹介すると、まずラスコーの壁画やロゼッタ･ストーンのレプリカ。ロゼッタ･ストーンは、一体何が書かれているか解らなかったので、これはとりあえず感動はしたという程度。それから杉田玄白の「解体新書」と、その元となった「ターヘル･アナトミア」。正直これは印刷技術に関する展示と言うより、人体についての展示じゃないか、と言う気もしましたが、その当時から使われていた印刷技術の鮮明さに深い感銘を受けました。そして手動式の映写機、古いタイプライターなど、他にもたくさんの興味深い物が展示されていましたが、実はあまりじっくりとは見ることができませんでした。

私が足早にそれらの展示物を後にした理由・・・それは「ＶＲシアター」という場所で３Ｄ映像を見るためでした。シアターのイスに座った私をつつんだのは約１５０°はあるだろうかという大画面。そこで始まったのは世界有数の印刷所でもあったクリストフ・プランタンの家を３Ｄで見学する、といったものでした。かなり手の込んだ映像に NHK の教養番組のような語り口。そして、ジェットコースターのような目線で展開する印刷工場見学。とても内容もよく、面白かったのですが・・・　シアターを出ると私は極度の３Ｄ酔いをしてしまい、お土産話と頭痛をセットで持ち帰ることとなったのですが、今回の見学自体にはとても満足しています。

PHOTOS：真鍋智史（１年）

貴重な体験を学科の学習に

目野 吉美（１年）
Yoshimi Meno

５月１４日、ドキュメンテーション学会主催で、飯田橋にある印刷博物館へ見学に行きました。

印刷博物館と聞くとどうしても紙媒体の展示物が多いイメージがあり、また移動の際に乗った電車内で見つけた「印刷博物館特別展」の広告を見ても、私たちには馴染みのない言葉が並んでいて、いったいどんな展示内容なのかうまく想像することができませんでした。ですが、印刷博物館に着き、学芸員の方による映像を使った説明を聞いて、その展示内容の幅の広さに驚かされました。また実際に足を踏み入れた展示フロアには、ラスコーの洞窟壁画から、江戸時代に家康が作らせた銅活印字組版、東京オリンピックのポスター、それに私たちもよく使うコンパクトディスクやコンピューターの配線盤、目の錯覚を利用した仕掛け絵などもあり、印刷物の進化の過程と、一口に「印刷」と言ってもその範囲は広いのだということが理解できました。

いろいろな展示がありましたが、その中でも私がとくに興味を持ったのは、活版印刷の工程を説明していた映像です。現代ではワープロやパソコンを使って簡単に文字を印刷できますが、活版印刷は、まず文字を鋳造し、それから組版をして、やっと印刷することができます。この工程を知って、活版印刷された書物が、資料としての価値だけではなく、当時の発明技術の粋を集めた物であるということが分かりました。

博物館に来るまでは、どんな展示内容なのかもよく分かっていませんでしたが、実際に行ってみると、どれもドキュメンテーション学科に関連のある展示内容ばかりで、とても興味深かったです。人類とともに進化してきた印刷の歴史が、見て、聞いて、触って体験することができ、全部を見て回るには時間が足りないくらいでした。おそらく個人ではなかなか行く機会のない博物館だったので、この貴重な体験を、これからのドキュメンテーション学科の学習にぜひ活かしていきたいと思いました。

平成16（2004）–17（2005）年度

ドキュメンテーション学科・学会活動報告

平成１６（２００４）年

４月８日（木）

学科オリエンテーション

４月５日の入学式が済んで間もない４月８日に、ドキュメンテーション学科の教員６名（岡田靖・原田智子・長塚隆・堀川貴司・大矢一志・伊倉史人）による新入生への学科の内容を紹介するオリエンテーションを実施。各教員は約１０名の学生からなるクラスの担任となり、４月中に学生との個別面談も行われました。

４月２４日（土）

ノートＰＣの貸与及び説明会の開催

新入生全員にノートパソコンを貸与、あわせて説明会を開催しました。説明会ではノートパソコンの基本的な設定や使用方法の説明と、実際の利用に当たっての利用規約や保管場所などの説明が行われました。

５月２６日（水）～７日（木）

新入生情報リテラシー補習授業

新入生全員が早くパソコンの扱いに習熟できるように、授業以外に特別の補習授業を実施。この補習授業を実施することで、入学時にはほとんどパソコンに触ったことがなかった新入生もコンピュータの扱いになれ、基本的なタッチタイピングやワープロソフトを使った文書作成ができるようになりました。

７月２４日（土）

ドキュメンテーション学会発足

ドキュメンテーション学科教職員、学生及び卒業生、その他の関係者で構成されるドキュメンテーション学会が発足。会の目的は、ドキュメンテーションに関わる諸科学の学際的研究を推進し、相互の研鑽を積むことにあります。学会ではドキュメンテーションに関わる調査・研究、その経過の発表、講演会・研究会・見学会の開催、会誌・会報等の発行などを行います。

PHOTO：豊部祥子（１年）

１０月２３日（土）

ドキュメンテーション学科設立記念式、并に記念講演会・レセプション

学科のスタートと総持学園８０周年を記念し、学科設立記念式、記念講演会、レセプションを鶴見大学会館にて開催。当日は、学外の関係学会、協会、企業などから多数の方にご参加いただきました。また、学内からも髙崎直道学長（当時）を始め多くの教職員の方にご出席いただきました。

学科設立記念式では国文学研究資料館長（当時）松野陽一先生からご祝辞を、記念講演会では慶應義塾大学文学部教授・メディアセンター所長の細野公男先生より「デジタル情報の世界」と題してご講演を頂きました。また、レセプションは慶応義塾大学文学部教授・図書館情報学会会長上田修一先生のご祝辞と乾杯のご発声で始まり、和やかな懇談の場となりました。

１１月９日（火）～１２月７日（火）

秋期情報リテラシー補習授業

前期に実施された補習授業に引き続き１１月から１２月に合計５回にわたり実施。習熟度に応じたExcel と Word のコースが６時から７時３０分まで、通常の授業終了後に開催されました。参加者全員が熱心に補習授業を受講し、入学時にはほとんどパソコンに触ったことがなかった新入生もコンピュータの扱いになれ、Word での文書作成や Excel での表作成や集計、あるいはピボットテーブルやマクロの活用などの基本的な技術を習得出来ました。

１２月２２日（水）

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

学会主催による Ching-chih Chen 教授（米国シモンズカレッジ図書館情報学大学院）による国際セミナーを開催。Global Memory Net Offers the World Instantly: Potentials for Universal Access to Invaluable Japanese Contents（世界に情報提供 Global Memory Net：日本の貴重なコンテンツへの海外からのアクセスの可能性を探る）と題して講演会が開催されました。当日は、ドキュメンテーション学科の１年生や他学科の学生の他に、他大学の図書館員や情報専門家など学外からも多数ご参加いただきました。

参加した学生からは、文化資産のデジタル化による公開の試みについて、大変興味を覚えて自分でも取り組みたい、英語での講演だったので細部までよく理解できなかったが講演原稿をよく読みなおしたい、など積極的な意見が多く見られました。

文化遺産を守るための技術が向上していくのは素晴らしいことだと思います。この分野の技術がさらに発展し、高い評価を受けるようになれば、人々は文化遺産を破壊するような過ちを繰り返すこともなくなるのではないでしょうか。自分も将来そういう技術を身につけたいと思いました。

（講演会 感想文より　２年　若林由縁）

平成１７（２００５）年

２月１日～２日

学年末情報リテラシー補習授業

期末試験終了後の２月１日と２日の両日、朝１０時より３時まで、ノートパソコンを使用し、Excel の活用方法についての実習・問題演習を交えた補習授業がドキュメンテーション学科１年生を対象に行われました。

新任教員紹介

元木 章博　Akihiro Motoki

はじめまして。元木章博と申します。私は昨年度末まで私企業でプロジェクトマネージャ・システムエンジニアをしていました。実は、それ以前、地方公務員・国家公務員をしていたこともあります。縁あって、鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科の専任講師として着任しまして、この４月から他学科向けの授業をしています。本学科の学生の皆さんとは、２年生の後期から専門科目でお目にかかると思います。どうぞ宜しくお願いします。

４月５日（火）６日（水）８日（金）
入学式・学科オリエンテーション

学科にとって２度目の春に、新入生７５名を迎え入れました。これからは、この学科の中でも、「先輩」「後輩」ということばが聞けるようになるでしょう。６日には２年生向けに、８日には１年生対象にオリエンテーションが行われました。

４月２３日（土）
ノートＰＣの貸与及び説明会の開催

新入生７５名にノートパソコンを貸与。引き続き、昨年同様説明会が開かれました。真新しいノートパソコンを前に、学習意欲をかき立てられたのではないでしょうか。

５月１４日（土）
印刷博物館見学

新入生全員と２年生の希望者で印刷博物館（東京・飯田橋）見学。折しも、「プランタン＝モレトゥス博物館展　印刷革命がはじまった：グーテンベルクからプランタンへ」という企画展が開催されており、総合展示に加え貴重な資料を堪能することができました。学芸員の本多真紀子さんに博物館の概要説明をしていただきました。

> 日ごろ、文庫や新書などの決まったレイアウトの印刷物しか読んでいなかったので、本には決められた形はないのだということを実感することができました。
> （見学会 感想文より　１年　友岡麻里江）

５月１７日（火）～６月３日（火）
新入生情報リテラシー補習授業

昨年同様、新入生全員を対象に特別の補習授業を実施。今年の新入生は、キーボードになれている人が多いようです。補習授業は６月の初旬まで続きます。

■ 第２号は９月末日発行の予定です。執筆希望者は、編集委員へお問い合わせ下さい。掲載写真も随時募集しています。
■ 編集委員
〔学生〕阿瀬正裕（2年）・北村雅美・真鍋智史（1年）・大胡昌子
〔教員〕長塚　隆・伊倉史人

ドキュメンテーション　第１号
平成１７（2005）年５月３１日（火）
鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会
横浜市鶴見区鶴見 2-1-3（〒 230-8501）
☎ 045(581)1001（代表）発行責任者：岡田 靖
http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/